

根の堅洲国（ねのかたすのくに）

うさぎ神のお告げのとおり、オオクニヌシは、ヤガミヒメと結婚しました。けれども、おさまらないのは兄神たちです。

ある日のこと、兄神たちは、オオクニヌシを伯耆の国の手間山のみもとに誘い出していいました。

「この山にはあばれものの赤いのししがいるんだ。おれたちが山の上からそいつを追い落とすから、おまえ、下でつかまえてくれ。もし逃がしたら命はないぞ」

オオクニヌシが山の下で待っていると、兄神たちは、いのししに似た大きな岩を真つ赤に焼いて山の上から転がしました。オオクニヌシはいのししだと思って受け止め、そのまま焼け死んでしまいました。

オオクニヌシの母親はなげき悲しみ、高天原の神にうったえました。すると、キサガイヒメという赤貝の女神と、ウムギヒメというハマグリ（ハマグリ）の女神が地上に下りて来ました。そして、キサガイヒメが、オオクニヌシの体を、岩から貝殻でこそげ取りました。ウムギヒメは、乳の汁を、オオクニヌシの体にくまなくぬりました。オオクニヌシは生き返り、もとのとおり元気になりました。

兄神たちは、腹を立て、また、オオクニヌシを山に誘い出しました。そして、大きな木を切り倒して割れ目にくさびを打ちこみ、オオクニヌシを割れ目におしこむやいなや、くさびをはずしました。オオクニヌシは木の割れ目にはさまれて死んでしまいました。

母親は、オオクニヌシを木の割れ目から助けだして、生き返らせました。そして、「おまえは、ここにいろかぎり、兄神たちにねらわれます。紀伊の国へ逃げなさい」といいました。

オオクニヌシは、遠く紀伊の国へ逃げて行きましたが、それでも、兄神たちは追いかけて来ました。すると、紀伊の国の神が、いいました。

「スサノオさまのいらっしゃる根の堅洲の国へおいでなさい。きっと助けてくださいるでしょう」

紀伊の国の神は、スサノオを木の股に開いたうろへと導きました。うろは、地下にある命の源の国、根の堅洲の国へ続いています。

根の堅洲の国に着くと、美しい娘が出て来て、

「わたしは、スサノオの娘、スセリヒメです。何のご用でしょう」といいました。オオクニヌシは、

「兄神たちから逃れてきました。スサノオさまのお力をお借りしたいのです」といいました。

スセリヒメは、御殿のうちに入ると、スサノオに、

「お父さま。とても美しい方がいらっしゃいました」といいました。スサノオは、オオクニヌシを中へ呼び入れました。

その晩、スサノオは、オオクニヌシをへびの室屋に寝かせました。

スセリヒメは、こっそりオオクニヌシにへびのひれを渡していました。

「もしへびたちがあなたを食おうとしたら、このひれを三度ふって追いはらいなさい」夜中になると、たくさんのへびがおそいかかって来ました。オオクニヌシが、へびのひれを三度ふると、へびはすっかりおとなしくなりました。オオクニヌシは、ぐっすり眠りました。

つぎの晩、スサノオは、オオクニヌシをむかではちの室屋に寝かせました。すると、

スセリヒメは、こっそりオオクニヌシに、むかではちのひれをわたしました。夜中になると、たくさんのむかではちがおそいかかかって来ました。オオクニヌシは、ひれをふって、おとなしくさせました。

つぎの日、スサノオは、オオクニヌシを連れて、広い野原に行きました。そして、一本の矢を、野に放っていました。

「あの矢を見つけて来るのだ。そうすれば、おまえの願いを聞いてやろう」

オオクニヌシは、矢をさがしに、草を分けて入って行きました。スサノオは、それを見ると、まわりの草に火を着けて、その野原をぐるりと火で囲んでしまいました。オオクニヌシは、逃げ出る所をさがしましたが、見つかりません。そのとき、オオクニヌシの足元に、ねずみが一匹出て来ていました。

うちは ほらほら

そとは すぶすぶ

オオクニヌシは、すぐに、地面をふみつけました。すると、中がほらあなになっていて、オオクニヌシは、どすんとあなに落ちました。外への入り口はすぼまっていて、火は入って来ません。火はオオクニヌシの頭の上を通りすぎ、やがて消えました。そこへ、さっきのねずみが矢をくわえてやって来て、オオクニヌシの前に置きました。

オオクニヌシは、矢を持ってあなから出て行きました。スセリヒメは、オオクニヌシが焼け死んだと思っていたので、無事な姿を見て大喜びしました。

スサノオは、オオクニヌシを広く大きな室屋にまねき入れ、

「頭のしらみを取ってくれないか」といいました。オオクニヌシが、しらみを取ろうとすると、それはしらみではなくて、大きなむかでした。むかでがスサノオの頭をうじやうじやとはい回っていたのです。おどろいていると、スセリヒメが、棕（むく）の木の実と赤土を、こっそりオオクニヌシに手渡しました。オオクニヌシは、棕の実をかんで赤土を口に含んでいっしょにはきだしました。スサノオは、むかでをかみつぶしているのだなと思つて、心を許して眠ってしまいました。

オオクニヌシは、こっそり、スサノオの髪の毛をつかんで、室屋のたくさんの垂木ごととに、分けて結びつけました。そして、スサノオの生太刀（いくたち）と生弓矢（いくゆみや）、天（あま）の詔琴（のりごと）をつかんで、室屋を出ました。それから、五百人がかりでも動かせない大岩を戸口に転がしていき、スセリヒメを背負って逃げ出しました。

そのとき、天の詔琴が、庭の木にふれて、大きな音をたてて鳴りました。たちまち、スサノオは目を覚まして、追いかけようと思いました。ところが、髪の毛が垂木にしばらくつけられていたので、室屋が引き倒されてしまいました。髪の毛をひとつひとつほどこいでいるうちに、オオクニヌシとスセリヒメは、どんどん逃げていきました。

スサノオは、髪をほどこいてしまふとまた追いかけてきました。けれども、黄泉平坂まで来ると、あきらめて、こう呼びかけました。

「おい。その生太刀と生弓矢を使えば、おまえの兄神たちを追いはらせるぞ。坂の尾根まで追いつめ、川の瀬まで追いはらって、おまえが国の王となれ。そして、スセリヒメを妻として、りっぱな宮殿を造って暮らすのだ。オオクニヌシよ」

こうして、オオクニヌシは、スサノオから奪った生太刀と生弓矢を使って、兄神たちを追いはらい、国の王となりました。

原話：『日本古典文学大系古事記祝詞』倉野憲司・武田祐吉校註／岩波書店  
再話：村上郁